



現地の学校訪問で思ったこと

金指 沙絵

私たちは SMAN62 高校を訪問した。私は、今回のエッセイコンテストで発展途上国の貧困と児童労働について書いた。だから、インドネシアの同世代の学生が一体どんな教育を受けていて、どんな人達なのか、とても興味を持っていた。以前参加した模擬国連大会では、発展途上国の教育水準の低さの問題が提起されていたのだ。しかし、知り合った人達は、明るく楽しく、勉強熱心の、普通の高校生だった。生活も教育も日本と変わらないように思えた。私はなぜか、ほっとした。みんなはとても親切でフレンドリーだった。私たちが学校に到着した時の、在校生の歓迎ぶりは、まるで国賓のような待遇で、正直びっくりしたし、感激した。私は、誰かにこんなに歓待されたことは、初めてだったし、とてもうれしく、幸せな気持ちになった。その歓待の気持ちに応えようと、私達もソーラン節の踊りを披露した。練習時間は短かったが、感謝と日本の文化を伝えようと一生懸命踊り、少し胸が熱くなった。交流で、二人組のバディとなった女の子とは、かなり気が合って、英語での話が弾んだ。ラインも交換して、帰国後もやり取りをしている。初めての外国の友達ができ、とてもうれしかった。案外世界は、身近に繋がっているんだと感ずることができて、本当に貴重な体験だった。貧困については、都市部と地方では違うだろうが、今回会った学生達のように、みんながイキイキと教育を受けられるようになってほしいと思う。